

2. 雪の文化と誇りについて 06. 7

冬場の生活環境の維持として、雪をどう克服していくのかが論議されている。そこでは、効果的な除雪をどう計画するかといったことが主となっている。こうした議論を聞けば聞くほど、今ひとつつの視点として雪を無機物として扱うのではなく、有機的なものとして、文化的な面から総合的に検討すべし、と訴えたくなった。

「富山の特徴は何ですか」とよく人から聞かれるが、そのとき決まって「山、森、水、雪、米」と答える。このうち雪については、都会人にとってはレジャーにしかせないものという捉え方であろうが、我ら富山県民にとっては「雪はうつとうしい」ものの他府県の人には「誇らしく」いうことが多いのは、私だけではないはずである。

とはいっても、いざ多雪になると、除雪やら屋根雪降ろし他で困ることが多く、特に最近、農村部の高齢化がすすむにつれ、災害弱者として根本的な社会問題を呈した由々しき問題もある。これについては、除雪対策の検討という枠を超えて高齢者問題を如何に解決するかということが問題の核心となる。関係の方々を含めて広く議論して財政的な政策が必要かと考える。(災害弱者への援助ボランティアもなかなか機能しにくい状況にある。)

また、そうした問題とは別に市域における我らの生活環境には、除雪はあって当たり前の感があり、こうした感覚が汗水たらしての作業を敬遠しがちの傾向を形作っているように思える。このためか、親雪の意識がなかなか育たない。

私は、我らの生活や生活文化には雪がもたらしたものは大きく、これが富山の県民性となって結晶化していると思っているので、この点を踏まえて雪について自然の情景の他に精神構造の形成として、例えば粘り強さは雪が与えてくれた試練の結果ともいいたいし、またもっと積極的に雪にかかわって生活していきたいものである。

それにもうひとつ、たたみかけたい。今の世の中、雪の文化や糸瓜(へちま)もなく、機械力に頼って何でも片付てしまおうという風潮が強くなってきた。こうした状況であればあるほど、雪をもっと身近なもので親しみ、苦労を分かち合い、誇りを持つとともに助け合いの精神を育むことこそ、機械力中心の方策と対極する方策のように思えてくる。と同時に、克雪や親雪の発展として、建築や街づくりの観点からの検討も急務であり、雪を見ながら生活を楽しむとか、雪景色を十分堪能するとか、そんな楽しみ方の良さをもっと身に付けていくよう日常生活の面でゆとりを持ちたいものである。

結びとして、普段のゆとりこそが、雪に対して文化育成と誇りの醸成につながっていくものと主張したい。